異郷より。

TKミハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異郷より。

【Ｎコード】
Ｎ８０３４Ｘ

【作者名】
ＴＫミハル

【あらすじ】
勘当同然で家を飛び出し、流れの冒険者となったシャーロットに、ある日妹からの伝言が届いていた。曰く、こちらには帰りにくいかも知れないけれど、せめて手紙だけでも送ってほしい。また、半年以上連絡が途絶えた場合には、ギルドに捜索願を出そうとも考えている、と。……これは、そんな筆不精な姉シャーロットの冒険譚である。

妹への手紙　～北の町グレンタールにて～（前書き）

Ｒ１５と残酷描写アリは保険です。

妹への手紙　～北の町グレンタールにて～

親愛なるエリーへ

私は今、北の町グレンタールへ来ています。

前の手紙から二ヶ月ほど経ったけれど、そちらは変わりはないですか。

ここは春の時期になったばかりだというのに雪、雪、雪で、退屈しの

ぎには編み物や刺繍をするか書き物をするかぐらいしかないです。

編み物や刺繍をするよりはと、こうしてペンを取りました。

今回の手紙が早いのはそうした理由なのです。だから体調不良などでは

ありません。

たまに早めに手紙を送ると、シャロン調子でも悪いんじゃない、と毛皮

のコートや栄養のつく食べ物を指定のギルドに送るのはいいのだけれど

食べ物に関しては生ものだけは避けてください。

前にエリーが釣った魚を箱詰めにして送ってきてくれたことがありまし

たが、せめて干物にして欲しかったです。

預けられた日から一ヶ月は経っていたので、地下の涼しい場所に保管し

てあったとはいえ、蓋を開けるのには勇気がいりました。

それと、ドレスや装飾品を送るのもやめてください。

冒険者をやっている私には必要ないものです。

これまで送られてきたものは、ほぼ換金しましたが、たまに手紙でちゃんと使ってる？などと尋ねられ、その度心が痛みます。

次にギルドに預けるのは、実用品や保存食でお願いします。

それでは、けがや病気に気をつけて。

姉、シャーロット

追伸

手紙を書いてから三日、やっと吹雪がやんで空が晴れました！

ずっと宿の部屋にこもりきりだったせいか、上の文章が陰気なものになってしまいました……。しかし、これからは違います。

地元の人に訊いたところによると、この町の近くにそびえるキリジュ山にはとても見晴らしのいい高台があるとのこと。

こんな晴れはあまり長い期間続かないとも話していたので、明日にでも登る予定です。みやげ話を楽しみにしていてください。

妹への手紙　～北の町グレンタールにて～（後書き）

ここには基本的に補足などを載せる予定です。

エレナ→愛称エリー　シャーロット→シャロン　です。

雪山にて

地元民によれば、山の高台まで一本道で、天気が良ければ迷うことはないとのこと。

ふもとの町や、名所である『地獄口』の大穴が一望できる見晴らしの素晴らしさはもう語り尽くせない、と身振り手振りを加え説明してくれた宿の主人。

彼は天候の変化や山の名所に詳しい案内人を是非と勧めてくれたが、今に至ってそれは、商売っ気を出したのではなく親切心からだったとはっきり自覚した。

疑ってすまない、と心の中でその主人に詫びる。

シャロンは現在、前も後ろもまったく不明な吹雪の中を一人さまよっていた。

晴れていたのは本当につかのまで、しばらく登っていくと徐々に雲が出始め、まだいいかなと思っているうちにすぐに視界は雪と風に閉ざされ、見晴らしのいい高台どころか帰り道すらわからない状態である。

……どうして、こうなった。

歩いても歩いても、吹雪はやむ気配すら見せず、ひたすらまわりをびゅうびゅうと取り巻いている。

シャロンはかろうじてわかる地と空の薄暗い境界線に向かって必死に足を進めていた。
もはや体の感覚は鈍り、全身で重いズタ袋を引きずっているようでしかない。

ここで死ぬのだろうか。

その言葉がぐるぐると頭をまわる度に、必死で気力を奮い起こして、歩く、歩く、歩く。
ふと、気づくと境界線はなくなり、目の前が真っ白になった。

ああ、もうここまでか。

しゃがみこみ、やるせなさに思わず手を振り上げ、白い世界に拳を叩き込む。

ドカッ……ズシャッ。
あれ？

突然雪の壁に穴が開き、彼女は中の空間に頭から落ち込んだ。

埋もれていた体を起こし、雪を払う。後ろを振り返ると、そこは入り口になっていて、半分ほど雪で埋もれている。

……信じられない幸運だ。

どこかの岸壁にできた洞穴であろう場所は暗く埃っぽいが、宿の一室ほどの広さがあり、さらに目を凝らせば、奥にまだ人の通れそうな穴が開いている。

「……」

うわ、と驚きの声を上げたつもりが白い息が出ただけで終わった。

なんと奥の穴を通り抜けた先はちゃんとした部屋になっており、不恰好ながら棚やテーブルやベッド、丸太でできた椅子まで置いてあった。片隅には薪が散らばっている。

ああ早く火をつけてこの雪まみれの外套を脱いで暖まりたい。

ラッキーなことに、ここは誰かが住んでいたとき使っていたものがそっくりそのまま残っている。

まあ衣類とかはないが、あってもどうせ虫食いでボロボロだろうから別にいい。

しばらく考えて入り口近くへ戻り、そこの雪をかいて入り口を広げ、中央にあるくぼみに薪や手作り感溢れる木製の串を並べ、隅に置いてあった石で半円を描くように囲んでから火をつける。

徐々に大きくなる火種とパチパチと火のはぜる音に、彼女はやっと強張っていた体がほぐれていくのを感じることができた。

やれやれ、と一息ついて、シャロンは短毛皮（たんもうがわ）の外套と上着を干してある棒の隣に置いたカバンから干し肉と小さな塩の塊を用意し、奥の部屋から埃まみれの鍋を取ってきて、綺麗にしてから雪と一緒にさっきの食料を放り込む。

くつくつと煮える音と充満する匂い。外は吹雪だが、洞穴の中は暖かい。

シャロンは肉が煮えるまでのあいだ、もう一度カバンの中身をチェックすることにした。

水や干し肉、ドライフルーツ、それから塩の塊は充分にある。

……これで一週間はいける。普段からの備えが役に立ったな。

こういう時のためにいついかなる場合でもカバンには充分な食料を入れることにしており、事実それらに助けられたことはたびたびあった。

しかし裏を返せばそれらを使わざるを得ない状況に幾度もなった、ということでもある。

カバンをチェックし終わると、今度は腰の剣の状態を確かめる。ガチガチに凍りついていた柄もすでに溶け、スラリと抜くことができる。

「……あ、しまった」

腰につけていたはずの鈴が、影も形もない。

この雪山には魔物が幾種か棲んでおり、魔物除けの鈴を鳴らしていれば近寄ってはこない、という町の人の話を聞いて、買って結んでおいた鈴。

吹雪の中でなくしたのか、それがなくなっている。

まあ、どうにかなるだろう。

煮えた鍋を火から降ろし、直接木製スプーンですくって肉を口にした。

薄く塩味のついたそれを平らげてから奥の部屋へ行き、薪を用意する。

今夜は寝ずの番、か。

簡易寝台から持ってきた硬い毛皮を巻きつけ、結局下着以外全部脱いで干すことにして、そのまま一晩中炎を絶やすことはなかった。

吹雪のち晴れ、所により……（前書き）

前回、案内人なしで雪山に挑んでしまったシャーロットの運命やいかに。

吹雪のち晴れ、所により……

翌日は嫌味なほどよく晴れた。

乾いた服を着て、洞穴の住居から外へ出てみれば、辺りは一面の銀世界。目に映るのは、空の青と雪の白と木々の濃い緑しかなかった。

カバンから地図と水を取り出し、カップに入れた水の上に磁力のある鉄片を浮かべて北の方角を確かめる。

ふもとは南西。今から行けば、日の入りには町へ着くことができる。

無事帰る目処が立ち、もうここに来ることはないだろうと、シャロンは役立ちそうなものを持って帰ることにした。

どこか不恰好な木製の棚、木彫りのカップ。昨日世話になったぼろぼろの毛皮。

残念ながらこれといってめぼしいものは……。

そう思いながらいろいろ探っていると、棚の横に妙な物体があるのに気づいた。

丁寧に埃やクモの巣を払い、布で拭うと、それは剣の握りの部分だとわかる。

部屋全体に敷かれた板の隙間から飛び出しているこの大きさからして、刀身も大きめの部類に違いない。

「ふっ、くぅ」

シャロンはその剣を隙間から抜こうと試みた。しかし、板に挟まれそのまま凍りつきでもしたのか、柄をいくら引っ張ってもびくと

もしない。

汗がにじみ、はぁ、はぁと肩で息をするぐらいまでねばったものの、しぶとくそこに留まり続ける柄。

このままでは日が暮れる。

なんとなく心残りではあるものの、これだけのために時間を無駄にはできない、と彼女は埋まった剣を諦めることにして荷物をまとめ、その洞穴を出た。

確か町の人たちの話では『雪山では狼と白ジシに気をつけろ』とのことだったが……白ジシというのはどういうものだろう、などと首をひねりつつ、ふもとを目指して晴れ空の下をザボザボと歩いていく。

積雪は深く、場所によっては肩ぐらいまで埋まってしまうため、歩いているのかかきわけているのかわからなくなってくる。

それでもなんとか下へ向かうと、やがて雪に埋まるのが膝下ぐらいになり、やっと道らしくなってきた。

隙間の空いた針葉樹林の中へと続く道は、ひたすら歩く音と、枝から落ちる雪の音だけが響いている。

ここもきっと夏ごろには材木を運ぶ人でごったがえすのだろうな、と思いながら無心に歩いていると、

ギシ、ギシギシ。

枝が大きく軋る音が聞こえた。

……上に何かいるのか、と見上げても、雪がかぶった枝や葉があ

るばかりで変わった様子はない。

視線を道に戻すと、前方からガサ、ガサガサガサと音とともに何かが近づいて、逃げるまもなくシャロンの目の前に狼が飛び出してきた。

狼が喉笛目がけて食らいつこうとするのをかわして剣を抜き、脇腹に切りつける。

ギャウッと悲鳴を上げた相手はすぐに立ち上がり、血を流しながらも二三歩跳び退ると遠吠えで仲間を呼んだ。

辺りを見回せば、遠くからもう一頭がこちらへ向かってくる。

……まずい。あいつが来る前に片をつけなくては。

キキィキキィッ

油断なく手負いの狼の動きを窺うシャロンの頭上より、鳴き声とギシギシ軋る音が幾重にも届いた。すぐ近くの枝には、いつのまにそこにいたのか白猿が彼女を見下ろしている。

大きさは五歳の子どもほどの、動かなければ雪と紛れてしまうだろう獣。目の前だけでなく横にも、後ろにもいる。シャロンは猿が枝を揺らしながらじっと見ているのは、自分だと気づいた。

狼に食い殺されるのを、待っているんだ。

そう意識して背筋が凍る。次の瞬間、対峙していた狼が動いた。同時に木の上で待ちきれなかった猿の何匹かが彼女へ飛び掛かってくる。

白猿にしがみつかれた体は重く、そこへ牙を唸らせた狼が———

「ぁあぁぁぁあっ」
シャロンは叫んだ。

ものすごい力で猿を引き剥がし、食らいつこうとした狼の口から頭へ剣を突き刺し振り払う。
雪に舞う血飛沫の中、追いすがってきたもう一頭の狼の下から心臓を一気に裂き、投げ捨てた。

「生き、てる」
息が荒い。気がつくと、白猿の群れは姿を消していた。雪で血を拭い、疲労した体で再び道を歩き続ける。

歩いて、歩いて、日が傾きかけたとき、道の先の先から希望に満ちた音、何人かが歩く足音と人の声が聞こえてきた。

「そっちは……ですよー」
「見晴らし……」

棒のようになった足を必死で声のする方へ進ませ、木々の間の茂みを何回もくぐる。
やがて視界が開け、広い道と、幾人もの人が歩いているのに出くわした。

どよめきと悲鳴が上がる。
「おい、大丈夫か！？」
現地の人と思しき男が近寄ってくる。それを聞いたシャロンの体から急速に力が抜け、その場にがっくりと倒れ込んだ。

吹雪のち晴れ、所により……（後書き）

磁力のある鉄片→方位磁針　　シシ→獣

邂逅

大方の町民の予想より早く吹雪は去り、静かだった町は突如として活気に満ち溢れていた。
一日ゆっくり体を休めて回復したシャロンは、夕方せっかくなので地元の酒を味わおうと酒場へ繰り出すことにした。

しかし、娯楽の少ない小さな町では、起きた出来事はあっというまに広まる。
酒場ではなるべく目立たない、細長いテーブルの隅に座ったはずだったが、どこで聞きつけたのかほとんど行き倒れ状態だった彼女の話を聞こうと、いつのまにか人が集まっていた。

「おまえさんが一昨日出発したとき、山には人がいなかったんじゃないのか？よくそれで変に思わなかったな」
「いや、人がいなくてゆっくり楽しめる、と思っ、て……」
ぶわはっは、と耐え切れず酒場の主人が笑う。
「いやいや、この辺のもんは子どもでもあの天気で山へは登らないさ。裾の方に雲が広がってたじゃないか」
「……」
よく見るとまわりの男たちも皆一様に肩を震わせたり、我慢せずテーブルに突っ伏してひぃひぃ言ってる者までいた。
シャロンは憮然としながらも、運ばれてきたライ麦酒に口をつけ、一口ごくっと流し入れる。

死にかけたせいか、苦みが体中に沁み渡るようなうまさだった。
それから徐々に混み始め、注文がうるさく飛び交う中でも一人静かに飲み続け、たかったのだが……実際にはひげ面の酔っ払いにか

らまれたり、噂を聞きつけた相手に話をせがまれたりしてにぎやかに過ごして、しばらくのち。
酒場に来る客も一段落、やっとのんびり飲める余裕が生まれ、ここぞとばかりに新しい酒を注文するシャロン。

程よく酔っ払い、饒舌になった彼女は、何度目かわからない話を新しく来た客にしていた。
常連らしい中年の男ディランは、雪山にも詳しいのか、よく手入れされたあごひげを撫でながらところどころ口を挟んでくる。
「あんたの出くわした猿だが……あいつらは本当に厄介でね。たまに討伐依頼が出るから、引き受けちゃどうだい？そこそこの金にはなるよ」
「いや、残念だが見晴らしのいい丘に寄ったらもうこの町を出ようかと思うんだ。路銀も少ないし、その依頼を待つだけの余裕がなくてね」
「そうか、残念だ。正直、面白い話になりそうだと思ったんだが……」
「どういう意味だそれは」
シャロンの抗議に笑いながらも、男は三杯目のライ麦酒を一気に飲み干す。

「しかし本当に、あれは自分でも運が良かったと思ってる。あの洞穴を見つけなければ、今頃は生きていなかった」
「洞穴の住居ねえ……どっかで聞いた気がするんだよなー。おいオヤジ！心当たりねえか」
「うーむ……雪山の外れにある洞穴、ねえ。ちょっと待ってな」
突然話を振られた酒場の主人――いや、カルヴァンだったかカルヴィンだったかそんな名前だった――はごそごそと奥の棚を探り、黄ばんだ紙の束を取り出してめくり始めた。

「おい亭主、埃が舞ってる」
手でそれを払いながらシャロンが顔をしかめると、
「悪い悪い。確かこの辺に……あ、あった。三年前、アルフレッドの依頼。そういや未解決だったな」
「だろ？あのアル坊やの依頼ですっげー驚いたんだけど、結局誰も引き受けずじまい」
盛り上がる二人についていけず、思わず口を挟む。
「何のことだ？依頼って……」
「そうだな。まずは、本人に聞いてみるといい。おーい、誰かアル坊呼んでくれないか」
「いや、待て。まだ私は引き受けるとは……」
「いいっていいって。どうせあいつ、いつも暇してるから」
おう、じゃあ呼んでくるぜと笑いながら、店内で飲んでいた筋肉質の男たちのうち、一人が出ていく。
「……この近くにいるのか？」
「ああ、この店からちょいと裏へ入ってすぐのところに住んでるんだ。もともと観光案内人なんだが人見知りが激しくてね」
「……人見知りが激しいんじゃ案内人は無理だろう」
「ああ。だから今はもっぱら山で獲れた獣なんかを売って細々と生活しているらしい。よくあれで死なないもんだと皆感心してるよ」
「……」

しばらく待って連れてこられたアルフレッドは、予想に反して逆三角形のマッチョではなかったものの、髪の毛はぼさぼさで、無精ひげがひどい、どこの野生人かと思われるような容貌をしていた。

依頼と報酬と

なんというか、一気に酔いが覚めてしまった。
ディランは何も言わず、にやにやと成り行きを見守っている。
突っ込みどころはいろいろあったが、人見知りが激しい（かも知れない）相手にぶつけるのはまずそうだ。ここは一つ、無難な線でいこう。
「初めまして。私はシャーロット・リーヴァイス。その、いきなり呼び出してすまない」
と一応この黒髪の男、アルフレッドに謝罪しておく。
この町に多い茶色系の髪でなく、黒髪なのも気になるな、と思いつつ挨拶を述べた途端、長く伸びた前髪の下から青灰色の目がこちらを睨んだ。
しまった、どうやら怒っているらしい……といっても私は何もしてないんだが。
内心で冷や汗をかくシャロンを気づかい、酒場の主人（名前はカルヴァン？）が口を挟む。
「いや、こいつ普段から目つき悪いから」
「そ、そうなのか」
男は、こちらをじっと見ながら何もしゃべらない。
「えっと……あなたに少し尋ねたいことがあるんだ」
なぜ私が、と思いつつ誰も何もフォローをしないのでそう言っておく。
まわりの表情や雰囲気から、面白がって高みの見物をしているの

がよくわかる。

「……」

また無言。なんでもいいから反応を返してほしい。気まずいから。

と、その祈りが通じたのか、彼はかすかに頷いた。よかった、これで話が進む。

「それで、実は……」

言いかけてシャロンは自分がほとんど何も知らないことに気づき、こちらを傍観している二人に助けを求めた。中年あごひげ男ディランが肩を震わせ笑いながら、

「アル、おまえが以前出した依頼、もう一度聞かせてくれないか？ひょっとしたら、こちらの嬢ちゃんの話に関係あるかもしれない」

真剣な表情でディランの言葉を聞いていた男は、最後の台詞でばっ、と音が出そうな速さでこちらに向きなおった。

遺憾ながらこの反応で、どうして誰も彼の依頼を引き受けなかったのかがわかった気がした。

普通なら彼の姿を見た瞬間にさようなら、だし、報酬が充分貰えるかどうかも怪しい。関わるのも面倒くさそうだ。

「……依頼」

あ、初めて声を聞いた。姿から受ける印象より若く感じる。低くてわりと好みかもしれない。

「引き受けて」

「いや、だからまだ話も聞いていない！」

シャロンはちょっと待て、と額を押さえ、横でずっと肩を震わせているディランと、苦笑したままの亭主をじっとりと睨む。

「こいつ、いったい年はいくつなんだ」

「十七だよ」
笑いすぎて腹筋の痛くなったディランの代わりに酒場の主人が答えた。

……同い年か。
いろいろな意味で戦慄を覚えた瞬間だった。

「アル坊。ひげぐらい剃ってこい」
酒場の主人が小さなナイフを渡すと、彼は小さく頷いて奥へと入っていく。

「……案内人には向いていないんじゃないか？」
「まあ、その通りといっちゃあそれまでなんだが。あれでも、格安で引き受けるんで、一部には意外と人気があったりするんだ。服装や顔まわりを整えれば、そこそこ見られるしな……おい、ディラン。もうやめとけ」
笑い上戸状態がなかなか収まらなかったディランは、知らぬまに五杯目を空にして、テーブルに突っ伏している。
一気にまわったのか首まで赤い。……そのうちいびきまで聞こえてきそうだ。

「で、彼が戻ってくる前にどういう依頼なのか教えてくれ。この状況で直接尋ねたら期待を持たせてしまいそうだ」
「ああ、わかった。アルフレッド坊やの依頼内容はな、『雪山にあるダン・フォスターの住居を共に探してほしい』だ。何でも、そこに養い親の形見の剣があるらしい」

「成功報酬は銀貨３０枚と、悪くはないんだが……広い上に、魔物がうろつくような場所を探しまわろうって無謀なのはそうはいない。また、あいつの見た目や性格も災いして、結局未解決のままだ。そ

このディランも狩りのついでに挑戦してみたはいいが、二三日であっさり放棄しやがった」

「その、ダン・フォスターの住居の特徴は？」

「それが、岩壁にある洞穴を利用して作られたものみたいなんだ。おまえさんが迷い込んだっていう場所にそっくりだろ？」

洞穴の住居に、形見の剣。

シャロンの脳裏に、突き刺さったままで取り出せなかった剣のことが閃いた。

……あれか。

あそこに案内するだけで、銀貨３０枚なら悪くない。……しかし、あの時諦めなければもっと楽に大金を手にすることができたのに。

悔しさに拳に力を入れつつ、この依頼を引き受けることを決意する。

「話はわかった。それで、相談なんだが……雪山の地理や天候の変化、棲んでいる魔物の生態に詳しい奴はいるのか？」

「なんだ、受ける気になったのか？気が早いな」

酒場の主人が笑う。なんと言われようと、この幸運を逃す気はない。

「それならピッタリの奴がいる。そいつだ」

彼が指差した先には、髪はぼさぼさのままだが、ひげを剃って幾分さっぱりしたアルフレッドが歩いてきていた。

目つきと顔色は悪く、頬が若干こけているものの、ちゃんと普通の青年に見えた。

戻ってきたアルフレッドに依頼を受ける旨を伝えると、表情はあまり変わらなかったがそこはかとなく嬉しそうな雰囲気がにじんだ。
その青年と、明日の朝にまたこの酒場の前で待ち合わせることに決め、飲み直す気分にもなれなかったので酒場の主人にいとまを告げる。

この前の吹雪の日といい、最近大活躍の毛皮の外套を着込んで外へ出ると、凍てつくような澄んだ冷たい空気が辺りを支配し、小月と美月の二つが高く登っていた。

後ろからのっそりと出てきたアルフレッドが、同じように斜めに並んだ二つの月を振り仰ぎ見る。

しばらくして視線を戻したそのタイミングを掴み、シャロンは彼に話しかけた。
「依頼のことで連絡をするかもしれないから家の場所が知りたい」
黒髪の男は頷き、ボロボロの外套を引きずって歩き始める。背の高さが同じぐらいなので、おそらく貰い物か何かなのだろう。

気にはなったが、何分寒く、口を開くのにも気力がいる。こちらが震えているのに前を歩く男が平然としているのが信じられなかった。

裏通りに出て、人気(ひとけ)のないそこの隅に石造りで、もはや何十年と経っていそうな小屋っぽい家があった。
まさか、ここじゃないだろう……と考えたシャロンを横目に、アルフレッドがじゃあ、と軽く手を上げ、さっさとその家へと帰っていく。

青年を見送った後、歩きながら、この寒さで人が普通に住める場

所なのか？いや、見た目に反して中は快適かもしれない……とあれこれ想像をめぐらしているうちに、いつのまにか宿の部屋へと辿り着いていた。

依頼と報酬と（後書き）

銀貨１枚→約４，０００～５，０００円

道行きの前段階

次の日。二人は朝と昼の中間ぐらいに集まり、これからのことをお互い相談した。

「依頼の場所へ案内する前に……どうしても頼みたいことがある」

「……？」

首を傾げるアルフレッド。

「その……私が雪山に登ったのは、もともと見晴らしのいい丘へ行きたかったんだ。結局吹雪に巻き込まれて、まだ一度も行けてない。だから……先にそちらへ寄ってくれないか」

ああ、と彼は呟いて、

「朝早く出れば……平気」

「それで、できれば、案内役もして欲しい。依頼料は、少しだけまけとくから」

彼は素直に頷く。

よかった、一挙両得とはこのことだ。

シャロンは内心浮かれながらも、依頼を無事終えるため、アルフレッドのアドバイスを受けながら雪山を散策するのに必要なものを買い足すことになった。

「私があの雪山で歩いているとき、なんだか目がチカチカして頭が痛くなり、なるべく自分や木の下にできた影を見るようにしてやっと治ったんだが……あれをここの人たちはどうしているんだ？」

通り沿いに並ぶ露店を物色しながらシャロンが問うと、案内役のアルフレッドは頷き、ぐいっと袖を引っ張ってから歩き出す。

こいつは発声器官が衰えてやしないだろうか。

ため息を吐いて彼のどことなくふわふわした足取りに続くと、毛皮や羊毛でできた服などがずらりと並ぶ大きめの露店の中に入っていく。
「おっ、いらっしゃい！どれもいい物がそろってるよー」
露店のおばさんの威勢のいい声。

アルフレッドは、所狭しと並べられている品物から、目元を覆う木彫りの薄い仮面を示した。両脇には穴が開き、ちょうど目の位置に横に細く切れ目があってそこから見えるようになっている。
「これは……仮面舞踏会に使われるものそっくりだ」
シャロンは恰幅のいいその女性に断りを入れてから、手の込んだ彫りのものを一つ装着してみる。

「どうだ？似合うか？」
アルフレッドの口元がふ、とわずかに震えた。
「……大丈夫」
「今おまえ笑っただろ。やっぱり、もっとシンプルなのにするか……」
何点か見比べてみて、彫りの少ない濃い色のものを選んでおく。
「後は……」
「鈴」
「え？」
「魔除けの鈴は」
「あ、そうか。そういえばなくしたんだった」
探すと、小さな棚に、いくつか並べられている鈴。
それらを見つめていると、売り手のおばさんが話しかけてきた。
「どうだい？うちにはいい物が揃ってるよ」
「この鈴なんだが……装飾はともかく、効果が高いものが欲しい」
「お客さん目の付け所が違うね。この鈴は一つ一つ音色が違うんだ。

だから値は張るが、いくつもついているのを選ぶのが一番。これなんか綺麗だろ？」
彼女が持ち上げたものは、金の腕輪に小さな鈴が花のようにあしらわれていた。

「いや、もっと実用的なもので頼む。山へ登るときにしていきたいんだ」
「そうかい？こっちに猟師なんかがよく使うタイプのものがあるが……」
そう言って近くにあった籠を持ってくる。
「振ってみてもいいか？」
「かまわないが、慎重に扱っておくれよ」

カラカラ、と音がしたり、シャリンシャリン、と鳴ったり。本当にいろいろな音の鈴があり、なかなか選べない。
困ってアルフレッドに助言を求めると、高く長く音が響くものが優れている、と低い声が返ってきた。

ちなみに、ぼろぼろの服を着ているせいか、時折盗難を恐れての鋭い視線がいくぐらいで、彼の存在は店番の女性にほぼ無視されている。
まあ、人見知りをする奴らしいので、それはそれでいいのかもしれない。

「……よし、これにしよう」
いくつかの鈴が皮のベルトで連なるものと、先ほど選んだ木彫りの仮面の値段を尋ねると、銀貨２０枚だよ、とはきはきと返事が返ってきた。大きい露店の、最初の値としてはまあまあだ。
そして、この値がどれだけ引き下げられるかは自分の腕にかかっている。

「う～ん、そうだなあ。彫りも少ないし、大量に作れそうだ。銅貨５０枚でいいんじゃないか？」
「はあ！？あんた何言ってるんだい？せめて銀貨１０、いや１５は欲しいね」
「あいにく、ずっとここに滞在していたせいで持ち金も少なくて……銅貨９０ならなんとか」
「あんたのその外套。高級じゃないか。それで金がないなんて言わせないよ」
「これは、家から勘当された後、妹が届けてくれたんだ……ずっと大切に使ってる」
「……じゃあ銀貨１２枚じゃどうだい？」
「ぎりぎりで、銀貨１枚」
「こっちだって吹雪で店が開けなかったんだ。銀貨７枚。これ以上は下げられないよ！」
「天気も回復したし、まだまだ稼げるんじゃないか？なんならこの店のことを何人かに紹介しとく。銀貨５枚でどうかな。これで駄目なら他の店まわるけど」
にっこりと微笑んでシャロンがたたみかける。

「……わかった。本当にやってくれるなら、それで手を打とうかね」
しぶしぶながらも、やっと店番の女性は頷いた。
ひょいと品物を取り、赤い紐を上着のポケットから出しつつ、
「これが売却済みの印だから。店出るまで取るんじゃないよ」
言いながら短く切ろうとしたのをシャロンは止めた。
「その紐、くれるならもっと長く切ってくれないか？」
「あーもう、あんたには負けた。ちょうど耳にかけられる長さ二つ分だろ？持っていきな」
「どうも。ちゃんと宣伝しとくから」
「期待しないで待ってるよ」

成果に満足し、いつのまにかいなくなっているアルフレッドを探すと、露店の外にぼんやり立っているのに気づいた。
「待たせて悪かった。アルフレッドは何か買うものはないのか？」
駆け寄ると彼は首を振り、そっちはと尋ねてくる。
「後は……携帯食料とか。そういえば、お腹すいたな」

自覚した途端、きゅうとお腹が鳴り、切ない思いで食べ物の屋台を探すため歩き出すと、すぐに美味しい匂いが道向こうから漂ってきた。
「ちょっと行ってくる」
屋台へ走り、串焼きを二つ買って一つをアルフレッドに渡すと、驚いたように目を見開き、シャロンを見つめてくる。
「あのさぁ……一人だけ食べるってのはやっぱ気になるんだよ。それにずっと待たせちゃったし」
「……ありがとう」
串を受け取り、きらきらした眼差しで熱心に息を吹きかけ冷ましている。

そこまで喜ばれるとは思わなかった。
「え、っと……そういえばこれ、何の肉なんだ？シシ肉としか教えてくれなかったんだが……」
買っておいてなんだが、シシという言葉に、どうしてもあの白猿の姿が浮かんでくる。
「だいたいウサギとか、鹿」
「そ、そうか。猿じゃなくてよかった……」
「猿の肉は硬い、まずい。狼の方がマシ」
食べたことがあるような言い方が気になったが、無心に串焼きを頬張る彼を見て思い直した。別に、いいか。

串焼きを食べた後は食料品を買い、あちこちを回っているうちにすっかり日が傾きかけていた。
「もうさすがに足りないものはなさそうかな」
「……」
相変わらずアルフレッドは無言だったが、なんだか午前中よりしっかり立っているように感じる。
「今日はありがとう。最初はどうなることかと思ったが……うまくやれそうな気がしてきた。明日もよろしく」
自然に浮かんだ笑みとともに差し出した手を、アルフレッドは握り、二三度振って放す。

それから明日の待ち合わせ場所と時間を決めて、市の入り口にある広場で手を振って別れた。

道行きの前段階（後書き）

銀貨１枚＝銅貨９０～１００枚

見晴らし台

快晴。早朝に登るキリジュ山は、溶けかけた雪が凍っていて足場が悪い。

足元を確認しながら慎重にアルフレッドの後について歩くが、幾度か足を取られ、その度ひやっとしながらもなんとか持ちこたえてきた。

二人の鈴の音がシャンシャンと重なる中、固い足音をさせ、普段と変わらないペースで歩くアルフレッドの背中はすでに遠く、時々止まってはこちらを窺っている。

こちらも話ができる余裕はなく、始終無言。道程はまだまだ続き、この状態がずっと続くのは辛い。

せめて何か別のことで気を紛らせないと、八つ当たりしてしまいそうだ。

シャロンはよりよい足場を選んで進みながら、何も話さない相手への苛立ちを追いやり、あれこれと考えをめぐらせる。

そもそも、案内人なら気の利いた台詞の一つも言えるだろう、という考えが浅いのかもしれない。

例え案内人でも理由があってしゃべることのできない人は必ずいるはずだ。こうやって、足を止めて待っていてくれるだけ充分にありがたいじゃないか。

そう見ると、黙って待っている男に不思議と腹が立たなくなった。

アルフレッドは、しばらく歩いては振り返り、こちらの姿を確認してまた歩き始める。

不揃いな髪といい、変化の乏しい表情でじっと窺っている感じと

いい……何かを彷彿とさせるのだが……。
歩いているうちに、シャロンはその答えに行き当たる。
わかった、大型犬だ。
ぐだぐだと想像をめぐらしながら歩くと、道には少しずつ雪が増え、木も徐々に背の高いものより低いものの方が多くなっていく。
やがて苦しさが消え、運動に慣れた体が動きやすくなったところで細い道は終わり、突然視界が開けた。
どこまでもどこまでも続いている坂道は一面真っ白で、少し雪が溶けているため歩きやすく、やっと見回す余裕が生まれ始めた。
道の両脇には布で張られた丈夫そうな滑り止め、ちょっと下がった真ん中に看板が立っており、文字の書いてある矢印がそれぞれ正面と、東を差していた。
『北：見晴らし台』
『東：林道・地獄口』
東側の林道は、途中までかなりの広さがあるものの、その先はもう茂みの中に埋もれており、道筋がわからなくなっている。
おそらく、吹雪の時に誤ってこの林道へ入ってしまったに違いない。
「ここには書いてないが……あとどのくらい続くんだ？」
シャロンがアルフレッドに尋ねると、この坂を上ったらすぐ、と返事があった。

白い雪は光を反射して眩しい。アルフレッドを見れば、例のものを装着していたので、シャロンも店で買った木のゴーグルをつけて歩き始めた。

広い坂は進んでもずっと一本道で、脇道はまったく見られない。

「思ったより時間がかかってしまった。陽もだいぶ上がってきたし」

「……」

「天気もいいし、これから物見遊山の人たちで混み合うんじゃないか？」

「……」

また沈黙。だんだん道端の石ころにでも話しかけているような気になってきた。あ、犬だったか。

しばらく登り続け、また懲りずに話しかける。

「魔物がどこにもいなくてよかった……この鈴の効果は大きいな」

「……ここはもともと少ない。山奥へ行くと鈴があってもたまに出てくる」

これには返事があった。

「そうか。じゃあ、また戦闘になるかもしれないな。アルフレッドは戦えそうか？」

「……」

あまり戦力になりそうにない風貌だが……。

とりとめもなくそんなことを思いながら歩くうちに、やがて徐々に狭まった道の先に、岩壁が見えてきた。

この辺りは平らになっていて、小さな倉庫が設置されている。

岩壁の上へと続く道を慎重に歩き、登っていくと、やっと頂上へ

辿り着いた。
「う、わあ……」
遠くに雪を被った山々がそびえ、眼下には森が広がっている。振り返ればそこには今まで通ってきた道と、ふもとの町が手に取るようにわかった。

青空の下、素晴らしい景色を堪能しながら、ふと山の東側を見ると、森の一部だけぽっかりと白く空き、真ん中に大きな穴が開いている。
「あれは？」
とくに何の感慨もなく隣に突っ立っていたアルフレッドは、簡潔に答えた。
「ただの穴。ふもとでは『地獄口』と名前がついてる」
「ひょっとして道があって、行けたりするのか？」
「行ける。でも、遠い」
「そっか……できたら寄ってみたいんだが」
「……」
しばらく思案していたアルフレッドは、やがて頷いた。
やった、と思わず呟く。本当に、運がいい。この時間だとひょっとしたらあの洞穴で泊まることになるかも知れないが……。

頂上から下り、平らな場所へ再び戻ってきた。下には白く広い道、その先には足場に苦労して登ってきた森林がある。
「行きはそんなでもなかったが……下りは滑りやすいな。時間がかかりそうだ」
正直なところ、頂上からここまで来るだけでもかなり神経をすり減らしたシャロンはため息を吐く。
「急ぎの人は、滑り板を使う」
アルフレッドが傍らの倉庫から歪んだ板のようなものを引っ張り

出してきた。
　それは大きな板の三方向から内巻きにゆるくカーブがかかっていて、前には掴むための短く太い紐、真ん中のふちからは手綱のようなものが伸びている。
「これはそりじゃないか？本の挿絵で見たことがある。でも、この下はずっと下り坂で、かなりスピードがでそうだな」
　アルフレッドは頷き、
「……使うのには技術がいる。稀に、興味本位で使った観光客が崖から飛び出す」
柵も何もない道の縁を指差した。

　これは、絶対に使いたくない。
「やっぱり地道に下りるか……しかし、この二つの紐はどうやって使うんだ？」
「……まず、前の人がここを握る」
　アルフレッドが乗るようにと促したので、せっかくだから乗り方だけでも学ぼうと、その滑り板に乗り、座って紐を掴んだ。
「後ろの人は調整役。長い方を持って、安全を確認して、後ろを蹴る。……こんな風に」
　アルフレッドは後ろの紐を持ち、滑り板に片方の足をかけ、もう片方で雪を強く蹴って見せた。

　ちなみにこの滑り板の先端は、下り坂の始まりの部分近くにある。
「おい……」
　蹴った勢いで、全体がずるっと大きく前へ傾いだ。
　落ちた先でドン、と軽く跳ねると、滑り板は下へ勢いよく走りだす。
「うわあぁーーっ」

叫んでいる間にも景色はビュウビュウ後ろへ流れていく。

アルフレッドが舵を取っているのか、崖に近づくとぐいっと曲がって別の方向へ走り抜け、大きく蛇行しつつも、最終的には張られた滑り止めの布にぶつかって止まった。

「ちょ……アル……行くとき、は、せめて、一言断って、くれ」

紐をぎゅっと握り締めたままで、息も絶え絶えに訴える。

シャロンのやや恨みがましい口調にも表情を変えず、彼は無言で手を差し伸べた。

追憶の場所（前書き）

多少の流血描写があります。ご注意ください。

追憶の場所

茂みの先、林の間の道は今日も静かだった。
そのせいで雪の上を歩く二人分の鈴の音がシャリン、シャンシャンシャンとやけにうるさく聞こえ、心配していた魔物は、今のところ襲ってくる様子はない。

「例の所はここから北東の方角にある。まだ、だいぶ歩くかもしれない」
「……」
アルフレッドは、視線を落として俯きがちにしている。顔色を窺ったが、もともとがあまりよくないのでわからなかった。

林を抜け、北東へしばらく行くと、雪が深いときには気づかなかったが、そこはちょっとした渓谷になっていた。
そびえる崖のせいで日が差さない部分はまだ凍っていて油断を許さない状況である。

足元に注意しながら歩き続け、やっと遠くにあの洞穴の入り口らしきものが見えたので振り返り、呼びかけようと口を開くと、アルフレッドがシャロンを突き飛ばした。

「おい！何を、」
突然、高台から狼がシャロンのいた所へ飛び下りてきた。
とっさのことで判断できない彼女の横で、アルフレッドが狼の鼻っ面を蹴りつける。

ひるんだものの、体勢を整えた狼は近くの獲物――――アルフレッドに飛び掛かった。

「くそっ！」
シャロンが喉元目がけて剣を突き刺し、薙ぎ払うと、振られた狼は地面に叩きつけられ、息絶える。

「大丈夫か！？」
倒れていたアルフレッドはどこか虚ろな眼差しを宙にさまよわせていたが、その視線が傍らの狼の死骸に止まり、むくりと体を起こしてにじりよった。
「……にく……」
「ちょっと待て。あれはよせ」
彼はぎらぎらした眼差しで狼を見つめている。シャロンはひとまずどこにも怪我がないか確認した後、
「とにかくあそこの洞穴まで進もう。私のカバンに携帯食料が余分に入ってるから」
そう言って引き留めると、アルフレッドは名残惜しそうな表情で視線を狼から引き剥がし、立ち上がった。

狼自体を諦める気はないらしく、黙って傍に行くと自分のカバンから縄を取り出して狼の足を縛り、木へと吊るしておく。

どうも、前途多難だ。
ふらふらなアルフレッドを時には支えつつ洞穴へと辿り着いたシャロンは、ため息を吐きながらもさっさと火を起こし、食事にすることにした。

彼はそわそわしてお湯が沸くのを待っていたが、シャロンがお湯をコップに入れ、食料を分けたとたん食前の祈りもそこそこに食べ始め、あっというまに平らげてしまった。

さらに期待に満ちた眼差しで見つめてくるので、シャロンは自分

の取り分からも分けて相手を落ち着かせた。
「ひょっとしてずっと……お腹が空いていたのか？」
アルフレッドは答えない。その代わりに立ち上がり外へ出ようとする。
「待て。どこへ行く」
「狼、取ってくる」
「……大丈夫か？無理はするなよ」
彼が頷き、出たのを見計らって、シャロンも上着を脱ぎ、布をお湯で湿らせ顔や体についた返り血を拭った。

奥の部屋は相変わらず埃っぽく、歪んだ家具や固いベッド、隅にはガラクタが置かれている。
薪になりそうなものはないだろうかと、このあいだは手をつけなかったガラクタの山を探ってみると、いくつかの資材が見つかり、それに紛れて何か平たいものが置いてあるのを発見した。
「鞘、か」
そういえば、と依頼の品はここの剣だったのを思い出す。

棚の横には、やはりこの前と同じように剣の柄が埋まっていた。
「くっ」
掴んで引き抜こうとすると、わずかに動いたものの、やはり抜くことはできない。

やがて夕方になり、アルフレッドがいくつかの薪と、野ウサギを抱えて返ってきた。
「あれ？狼はどうしたんだ」
「……とられた」
悔しそうな表情。いったん外に出て野ウサギを肉の塊にして戻ってくると、切り分けて鍋に水と塩とともに入れ、火にかけた。

そうやって腰を落ち着けた彼は、どことなくリラックスしているようにも思える。
「それで、ちょっと来てくれ」
煮えるまで時間があるので、奥の部屋へ案内すると、入った瞬間にアルフレッドが呟いた。
「……懐かしい」
耳をすませていなければ聞き取れないような小さな小さな声。
ここに住んでいたことがあるんだろうか。

疑問を感じながらも、シャロンは例の柄の場所へと彼を連れて行く
「これがその剣のはずだ。残念ながら、固くて抜けないが」
アルフレッドは少し考え、鍋からお湯を持ってきた。
「……」
流し入れると湯気が部屋中に立ち込める。彼は時間を置いてから柄を握り、一気に引き抜いた。
「長いな。……横幅は中指の第二関節ぐらいか？」
シャロンの呟きに目を細め、傍らの鞘へとその剣をしまい、ガラクタの山から取り出したベルトで装備する。残念ながら、剣が大きいためバランスが悪い。

「くくっ」
シャロンは口元を押さえたが、もう我慢できないと言いながら大きく破顔し笑い出した。

名所巡り

アルフレッドと交代で火の番をしつつ、洞穴で一夜を過ごしたあくる日。

シャロンがお湯を沸かしている間、外の様子を見にいく、と言って出ていったアルフレッドがすぐに取って返してきた。
「どうした？忘れ物か？」
尋ねると言いにくそうにしていたが、
「……囲まれている」
とぼそっと呟いた。

「え。何に」
「白ジシ。たぶん、匂いにつられて来たんだと思う」
「……本当か」
シャロンが入り口から外を窺うと、あちらこちらに白猿が徘徊していた。

何匹かはこちらを窺っているが、警戒心が強いのか近寄ろうとはしない。
「たぶんここから外へ出た時に一気に襲ってくる」
「鈴は効かないのか？」
「……やってみる」
アルフレッドが二人分の鈴を鳴らすと、慌てたように飛び跳ね、あれほどたくさんいた白猿の姿は見えなくなった。

「よし、行くか」
荷物を持って外へ出ると、空には薄く雲が広がっていた。
「雲が出てるが、どう思う？」

「風もあまり速くない……今日一日は大丈夫」
アルフレッドが腰に下げた大剣を重そうに引きずりながら答える。
「それは無茶だ。背中にくくるといい。まあ、すぐには使えなくなるけれど、しょうがないな」
彼はその言葉に従い、背中にその剣をくくって荷物を背負い直す。
「……ここから、地獄口は近い」
正直、いろいろありすぎて観光名所をめぐるような気分ではなくなってきていたが、そこまで近いなら行っておこうかと、洞穴の北のルートへ向かう。
歩くと、それほど長くかからないうちに崖にぐるりと囲まれた場所に到達した。
前方にはぽっかりと、家五軒は入りそうな穴が口を開けていた。近くへ行って覗いても、背筋が寒くなるだけで、何も見えるものはない。
「……これ」
アルフレッドが頭ほどもある石を持ってきて、穴に投げ入れる。
石は内側の深い闇へ吸い込まれ、それっきり何の音も響いてこなかった。
「そ、相当深いってことだな？」
シャロンが尋ねると、彼は切り立った崖の奥を見つめ、
「……昔、この穴は別世界へ繋がると信じられていて、多くの者が違う世界を夢見てここへ飛び込んでいった。でも、誰一人として返ってこず、残された者の悲嘆と恨みから、いつしかこの穴は地獄へ通じるとの噂が広まった。それでついた名前が『地獄口』」
いつになく丁寧に教えてくれた。

「『地獄口』か……」
緊張の面持ちでゆっくりとふちを離れると、どこからか猿の鳴き声が聞こえてきた。

キキィ、キキ、キイキイキイ。
キィ、キキキッ。キッキッキッ。

白い猿は雪に紛れて見え辛いが、鳴き声からかなりの数が近くにいることがわかる。
油断なく辺りを窺いながら穴と距離を取ると、崖と崖の隙間に隠れていた何匹かの群れが一斉に襲いかかってきた。

「おい、アルフレッド！大丈夫か！？」
自分に近づいてくるのを牽制するのが精一杯のシャロンの横で、アルフレッドが背中から大剣を下ろし、抜き放つ。
「……たくさん食べたから、大丈夫」
そう言ってまわりにたかる白猿の群れを、一気に薙ぎ払い微笑んだ。

めちゃくちゃだなあれは、とシャロンはいったん彼から離れて独りごちた。
力任せに剣を振り回すだけで何の形にもなっていないが、確実に動く白猿の数は減っている。

近づくと巻き込まれそうなので、猿斬り装置と化したアルフレッドは放っておき、目の前の白猿の群れに集中する。

鈴をつけているのになぜ、という疑問は、死んだ猿が耳に葉や皮を詰めていたので氷解した。

「悪知恵の働く奴らだ！」
白猿の数は確実に減っているものの、その勢いは衰えることがない。

かなりの数を斬り、シャロンの感覚が少しずつ鈍り始めた。握る手も返り血でねばつき、動かしにくくなっている。
さすがにアルフレッドも最初の勢いはなくなり、息が乱れているのか大きく肩を上下させている。

避け損なった白猿の爪に頬を思いっきり引っかかれ、空を仰いだシャロンの目に、ひときわ大きな白猿が丘の上からこちらを見下ろしているのが映った。

咄嗟に腰に差している小型ナイフを投げると、運よくその猿の鼻から右目へと突き刺さり、同時に轟くような咆哮が上がる。

それが響き渡ると、辺りにいた猿たちにもすぐに変化が訪れた。慌てたように飛び跳ね、後ろを向くとあっというまに遠くへと逃げ去っていった。

シャロンはそれを見送り、ザクッと剣を突き立ててそれにもたれながら休息を得る。
「アルフレッド。怪我はないか？」
頷いて大剣の血を漱ぎ、また背中へ背負い直すアルフレッド。

彼を促して、これ以上何か起こる前にと『地獄口』に背を向けて帰路を歩き出した。

何とかふもとまで下りてきたが、大剣を背負い黙々と歩いていたアルフレッドが、酒場近くでいきなり倒れた。顔が赤く、額に手を

当てるとひどく熱い。

せっかくここまで来てこいつに何かあったら、骨折り損じゃないか！

シャロンはまだ貰っていない報酬のため、アルフレッドが治るまで面倒を見ることに決め、彼の家までなるべく引きずらないように連れて行き、荷物や装備を外して強引に冷えたベッドへ転がしておいた。

対価

彼の熱はなかなか下がらなかった。
おまけに防寒のための家具は石畳の床に無造作に敷かれた毛皮のみ。これじゃあ治るものも治らない。

アルフレッドが寝ている間に、雑木の枝を買ったり拾ったりして薪を揃え、氷のような暖炉の下の出っ張りを四角い石で囲んで細い鉄の棒を二本乗せ、即席のかまどを用意する。

石にはもともと鉄の棒を通せるぐらいの窪みがあったので、以前使われていたことは間違いない。しかし鍋と同じく隅で埃を被っていたのはどういうわけだ。

こんな部屋でも、火を入れるだけでずいぶんと暖かくなった。パチパチと薪のはぜる音が、耳に心地よい。

汲んできた水を鍋に入れ、簡単に野菜スープを作ってから買ってきたパンと一緒にベッドへ運ぶ。
薄く汚れた布と毛皮とで、この家の中で一番食事を運んでいきたくない場所だが、仕方ない。

「おい。起きて食事を取れ」
肩をパシパシ叩くとうっすら目を開け、ぼんやりとこちらを見る。
「……」
「調子はどうだ？」
水で濡らした布を外し、額に手を当て、少し熱が下がったことに安堵していると、アルフレッドが体を起こした。その上にお盆ごと食事を置く。

「おまえ、ろくに栄養取ってないだろ。暖炉も使った跡がないし……このままだといつか死ぬぞ」

反応が薄い。本当に大丈夫かこいつ。

「……あ、報酬」

やっと頭がまわり始めたのか、まばたいて胸元から細い鎖に繋がれた大きめのロケットを取り出した。

人の話をまったく聞いてないな、と思いながらも黙っていると、ロケットの蓋を開け、中から丸くて薄い金色の物体を取り出し、渡してくる。

「……これ、は金貨じゃないか。どうして」

緊張で口の中がからからに乾き、かろうじて唾を飲み込んだ。

「それがこの依頼の報酬。……本当はもう……諦めかけていたんだ。叶うとは思っていなかった」

心底大切そうに、傍らに置かれていた剣を掴み、引き寄せる。その剣を見る眼差しは、憧れと懐かしさに溢れていた。彼の養父がどんな人物だったかは知らないが、きっと大事にされていたんだろう。

金貨を握り締め、寒々としていた室内を眺める。

これだけのお金があれば、もっと多くの食料が買え、薪が買える。この部屋だって、もっと過ごしやすい暖かな部屋に変えることができただろうに、ずっと大切に持っていたのか。

返そうかとも一瞬考えた。だが、これはアルフレッドの気持ちの重さと同じ。そう簡単に突き返していいものだろうか。

シャロンは再び冷たい部屋の中を見渡し、ため息を吐いた。

「……おまえなあ。そういうことは、ここに来る前とか、せめても

っと健康な時に言ってほしかった」
もしそうだったなら、多少の後ろめたさはあれど、納得して受け取れたはずだ。

「……？」
こいつはまったくわかっていなさそうだなと、思わず笑みがこぼれる。
「その剣せっかく手に入れたのに、腕が悪いんじゃ宝の持ち腐れじゃないか？私も達人ってわけじゃないけど……初歩を教えることなら、できる」
首を傾げるアルフレッド。ほんっっとうに鈍い奴だ。

「だから、明日から一週間、剣を教えるって言ってるんだ。じゃないと明らかにこの金額は貰いすぎだろ。ついでにここも掃除して、もっと住みやすくする。このままじゃ教えにくる度に気分が寒くなりそうだ」
シャロンがすっきりした顔で笑うと、アルフレッドはまだ実感が沸かないのかぼうっとしていたが、ややあってこくっと頷いた。
「……ありがとう」

どうも、こういうのは苦手だ。シャロンは少し赤く染まった顔をそむけながら、
「私が好きでやるんだ、気にするな。アルフレッドはまずそこの食事をしっかり取って、早く病気を治せ。私はまず、水回りと暖炉周辺をなんとかするから」
本人はきっと大したことは考えてないのだろうけど、じっとこちらを見てくる視線に耐え切れず立ち上がり、慌てて暖炉へ向かう。

まずは食料。それと、新しい布も欲しいな。あのベッドの上のやつは全部捨てよう。

……こうなったら一週間の最後までとことん生活環境の改善をしてやると心に誓い、必要なものを頭の中にメモを取る。

シャロンは夕方までそこにいたが、皿の片付けなどあらかたすることが終わると、用意や宿泊の延長手続きもしないといけないので、きちんと食事をとれよ、また明日来るからと一声かけて、宿へと戻っていった。

対価（後書き）

金貨１枚＝銀貨１００～１２０枚。だいたい地方だと１２０ぐらいで、中央（城下）へ行くほど少なくなる。

振り方指南

次の日からシャロンは、しこたま新しい布やほうきを持ってアルフレッドの家に押しかけると、徹底的に掃除を始めた。

野生人の家が騒がしいぞ、とうとう差し押さえか、と口々に子どもたちのはやしたてる声も気に留めず、ベッドの毛皮を引っぺがして外へ干し、薄汚れた布をごみにして台をはたき、新しい布に取り換える。

棚や床に溜まった埃やごみをほうきで掃き出し、片隅に積まれた道具を整理していらない家具をすべて庭（といえるかどうかもわからない家と家の隙間）に放り出した。

庭で所在なさげにしていたアルフレッドに部屋から発掘した斧を渡し、壊して薪に変えるよう頼む。

バシッ、ガコンッと薪の割る音を聞きながら片づけを進めると、昼前には部屋は見違えるほど綺麗になった。

「アルフレッド、少し休もう」

持ってきたバケットを小さな四角テーブルに置き、香草茶を木のコップに注ぐ。前はこのコップすら棚の片隅にずっとしまいっぱなしだったもので、こうやってここで人間らしく食事ができることに感動すら覚える。

「お前な〜、もっとこの状況を噛み締めたらどうだ」

「……充分噛んでる」

ベーコンを挟んだライ麦パンを口いっぱいにしながらアルフレッドがピントのずれた答えを返す。

「そういうことじゃなくて……あ、そういえば味はどうだ？他人の

ために作るのなんて久しぶりだからな」
「……平気。うまい」
あっというまに平らげての台詞に、シャロンはそれはよかった、と笑う。

「明日からは本気で練習始めるからな。今のうちに体力つけとけよ」
「……」
それから、病気のぶり返しが心配なので、念のためしばらく一緒にいて顔色や熱を確かめ、栄養をつけさせるため夕食の分も作ったシャロンは、これでいいと独り悦に入っていた。

あくる日、アルフレッドの回復に合わせ、とうとう本格的な指導が始まった。
昼前からグレンタールの外れの空き地で向き合いながら、
「で、アルフレッド……もう面倒だからアルでいく。私とアルの剣はまず、種類が違うから、その扱い方も違う」
シャロンは自分の剣を抜き、アルフレッドから受け取った剣と比べてみる。
「ほらこれは片手剣で、そっちは両手剣……でもないか……長さの割に軽いし」
片手剣としてはかなり重いが、ひょっとして練習すれば片手で扱えるようになるのかもしれない。

「先端から半分以上が両刃、下の方は片刃というのは初めて見た。変わった剣だな。……ま、最初は両手剣のやり方で行くから。で、まず、基本の動作から。縦に〈振り下ろす〉横や斜めに〈薙ぐ〉、相手の攻撃を〈流す〉〈受ける〉の四つで、そのうち振り下ろすと薙ぐの二つは先端に重心を置き、遠心力を利用して威力を上げる」
シャロンは彼の前で剣をゆっくり振り下ろし、続いて横に薙ぎ払ってみせた。

「じゃあ、まずやってみよう。柄の上を利き手、下をもう片方の手で握り、ゆっくりと振り下ろすんだ」
剣を渡されたアルフレッドは、右手を上にして大きく振りかぶり、下ろした。

ドガッ

「危ない！」
剣筋は揺れ、アルの足元へ切っ先が落ちる。
「練習始めでいきなり怪我をしたらどうする！」
思わず言ったものの、よく考えたらこの剣は重いのでもっと慣れた後の方がいいかもしれない。
「よし。もっと軽い剣にしよう。私の剣を」
「……これでいく」
いつになく強い口調で言った。

「そうか。なら、もうひたすらやるしかない。昨日薪を割った時の要領を思い出せ。慣れてきたら地面すれすれで止められるようにするんだ」

ドカッドカッ

剣で土を耕しているようなシュールな光景。やらせといてあれだが、刀身が傷つかないか心配だ。
「次に、薙ぎ払いだ。手首をひねって左へ流すなら右、右へ流すなら左手を動かすように意識をしてやってみろ。……その重さだとすっぽ抜ける可能性が高いから、絶対に手を離すな」
頷くアルフレッドに一抹の不安を感じながらも、横へ払うよう促す。
「……」

今度はなんとかできた。一回転しそうな勢いだったが。
「よし、じゃあこの二つを覚えよう。ひとまず両方素振り３００回で」
きつい練習にもアルは愚痴一つこぼさず、一心に剣を振っている。始めは地面に突き刺さっていた剣も素振りを日没近くまで続けていると、なんとかすれすれで止められるようになった。
「次に、〈流す〉と〈受け〉だが……これは今やった二つがしっかりできてからにしよう。今日はこれで終わり。どんなに疲れていても、ちゃんと夕食は取ってから寝ろよ」
終わり宣言を聞いた瞬間、がっくりと膝をついたアルフレッドに釘を差しておく。
実は、今日はわざわざ朝からアルフレッドの家まで行って料理を作っておいたシャロンだった。

振り方指南（後書き）

この剣術指導は、こういう教えがあるわけではなく、シャロンがわかりやすく伝えるために工夫した結果です。

想定内と想定外（前書き）

今回は読んでいて不快になる表現（特に女性の方）が入っています。ご注意ください。……そしてケイタイの方、読み辛くてすみません。

想定内と想定外

一通り基本を教えたシャロンは、成果を確認するため今日もアルフレッドの家に来ていた。

細長い庭で素振りをする音は、声をかけてもやまず、ずっと続いている。あいつは基本の教えに忠実に、手を抜くことなく無心に体を動かしていた。この分だと上達も早い。

自分のことのように嬉しくなりながら、昼と夜用スープのための野菜を刻み、次々に鍋に入れていく。　それから、買ってきた干し肉を切り分けようとしたところで、

「……何やってるんだ、私は」

ふと、今の状況が疑問に感じられた。毎日のように押しかけ、食事を作り、面倒をみる。これではまるで――――。

「……シャロン？」

アルフレッドが汗を拭きながら部屋に入ってきた。

「あ、ああ。もういいのか？」

「せっかく来ているんだから、手合せをしたい」

そう言って無邪気に笑う。

「……手加減はしないからな」

心の引っかかりを振り払い、肉切りナイフを置いて彼女は剣を取った。

夕方。早々にアルフレッドの家を出て、酒場に向かう。こんな時は、飲むのに限る。

たびたびそうするように酒場のカウンターに座り、主人を呼ぶ。
「マスター、蒸留酒『炎の恵み』を頼む」
「おい嬢ちゃん大丈夫かい？初っ端からそんなキツイの飲んで」
「……今日はそういう気分なんだ」
早いペースで中身を空け、マスター相手にこの町の寒さや雪山の魔物の性質なんていうどうしようもないことでくだを巻いていると、バタンとドアを開け、あごひげのディランが入ってきた。

「親父！聞いたか！？山の主が倒されたってよ！」
「本当か？いったい誰がやった？」
「それが、ゲイツなんだよ。あいつずっとあのでかいボス猿を追っていたから、いつかはなしとげると思ったんだ」
「それにしてもすごいな。報奨金も相当なもんだろ？」
「ああ、そのことなんだが……なんでも、あいつが倒したボス猿は、片目が潰れてたらしいんだ。ゲイツの野郎、ひょっとしたら別に報奨金を請求する奴が現れるんじゃないかって心配しててな。貰っちまえばわかるもんかって言ってやったんだが。シャロンは、何か知らねえか？前に白猿の群れに出くわしたんだろ？」
「……知らん」
テーブルに突っ伏したまま答えるシャロン。

「また、今日は荒れているな」
ディランは酒場の主人に小声で尋ねた。
「来た時からずっとこうだったんだ。何か嫌なことでもあったのかね」
首をひねっている二人をよそに、彼女はふらつく頭を振って立ち上がった。
「マスター。勘定」
「大丈夫か？ディラン、彼女を宿まで」
「心配いらない。まだ暗くなっていないじゃないか」

勘定を払うと、さっさと酒場を出た。ほろ酔い気分のまま、薄暗い道を歩き出す。

だめだ。全然気分が晴れない。酔ってはいても、頭の一部は冷めている状態。

……せっかく高い金を払ってきついのを頼んだのに。

「なあ、オレたちと遊ばないか？」

シャロンはいつのまにか、五人組の男に囲まれていた。

「こいつ知ってるぜ！最近あの例の掘っ立て小屋に出入りしている女じゃねえか」

「ひぇ～、こんなうぶな顔してやるもんだね。野生人の味はどうでしたか～」

「あいつにサービスできるんだったらぁ、オレらにも一つ頼んますよぉ～」

「……よかった」

そう呟くと、男たちは一様に訝しげな顔に変わる。

「ちょうど、イライラしてたんだ。八つ当たりさせてくれ」

まず、手近な一人を掴んで殴りつけると、みるみるうちに形相が変わる。

「このアマ！舐めやがって」

「やっちまえ！」

剣を使うほどのこともない。突進してくる相手を蹴り倒し、拳を顎に叩き入れる。

そうやって起き上がるのもままならないくらいに絡んできた奴らを痛めつけながら、シャロンは思う。

別に、いいじゃないか、傍からどう思われようと。私が一週間だ

けあいつの面倒をみると決めたんだ。
最後の一人を蹴倒して空を振り仰げば、いつかと同じように冴え冴えとした月が二つ、並んでいた。

そして、とうとう最後の日になった。

「すごいな。一週間でちゃんと形になるなんて。よく頑張った」
今までの総まとめと、打ち合いをしっかりやったせいで、彼の家に返ってきた頃にはすでに真っ暗になっていた。
「ありがとう。シャロンのおかげだ」
アルはまっすぐにこちらの目を見ながら礼を言う。目つきは少々悪くて髪は相変わらずボサボサだけれど、顔色や毛並……じゃなかった毛艶もいい。服も新しくなり、姿は見違えるようになった。

でも、もうこいつの面倒をみるのはごめんだ。……そう思いながら胸元の財布を押さえる。
結局、あの金貨はまだ使っていない。なんとなく使う気になれなかったのだ。

「……そもそも、お前の報酬が多すぎたんだから、礼は必要ない」
「……うん」
照れくさそうに笑いながら、何かを言い出せず躊躇っている。嫌な予感がした。

「僕も、旅に連れて行ってほしい」
「断る」
きっぱりと言う。期待を持たせることはしたくない。
「……もっと強くなりたいんだ。この剣を使いこなせるぐらいに。

それには、旅へ出た方がいいから。嫌だって言っても、ついていく」
強い眼差し。このまま断り続ければ、本当に宿までついてきそうだ。そういうのは誰か他の奴でやってくれ。
「……わかった。じゃあ、仲間になるか？」
「うん」
嬉しそうに頷く。な、なんだか罪悪感が……。
「でも、お前まだ旅に出られないだろうが。お金も何もないんだから」
「ここにある毛皮を売ればなんとかなる」
「じゃあ、明日の昼前に集まって、この町を出よう。私もまだ食料を買い足さないと」
じゃあ、また明日の昼前に、と笑ってその場を別れた。

その夜。酒場でなじみになった主人に明日の昼ぐらいに旅立つことを告げると、にやりと笑い、
「アル坊も一緒に行くんだろ？」
と返された。
「な、なんでそれを」
「いや～そういうことになるんじゃないかと思っていたんだよ。初めに言っただろ？人見知りするって。その代わり、一度懐いた相手はとことん信用するんだ」
「……へぇ～」
もっと早く言えよそういうことは！

その晩はほどほどに飲み、折よく来たディランにも別れを告げて、宿へ帰って荷物をまとめると、やはり寂しい心持がした。

翌日。日の出とともに起き、荷物を持って宿を出る。開門と同時

に外へ出て、できるだけ遠くに行くのが一番いい。さすがに、行き先までは誰にもいっていないから大丈夫だろう。

階段を下りてベルを鳴らすと、宿の主人が目をこすりながら出てきた。

「……もう行くのかい？」

「はい。お世話になりました」

この人がしてくれた忠告を、無視してしまったけれど……あれからもいろいろとアドバイスをしてくれていて、本当に頭が下がる。

「この時間だと、まだひょっとしたら門は開いてないかもしれないよ？」

「……いえ、行くのは近くの南門じゃなく、東門なんです。今から町を歩いていけば、ちょうど開門時間に間に合うかと」

「そうかい。じゃあ、気をつけて」

「それでは、これで」

宿を出て、徐々に白み始めた空を眺めながら、東を目指した。町は、まだ眠っているみたいだけれど、そのうちにぎやかさを取り戻し始める。

そうなる前にと、急ぎ足で見慣れた通りを突っ切り、まっすぐ東門へ。空はだんだん明るくなっていく。

あれ？ひょっとして迷ったか？

いつのまにかシャロンは袋小路へ入り込んでいた。これだからややこしい造りの町は嫌なんだ。もっと大きくて広い道を何本も作ってくれるといいのに。

自分の土地勘のなさを棚に上げてそんなことを思いつつ、やっと東門に辿り着いた。すでに開門されており、門番が両脇に控えてい

る。

「止まれ。まず門外不出の持ち物がないかチェックを受けてもらう」

屈強な体の男たちに入り口付近の小屋に連れていかれ、そこで受付のおばちゃんに念入りに調べられながらも、シャロンは外が気になって仕方なかった。まさかここで追いつかれる、なんて間抜けなことはないと思うが……いや、あいつの身体検査中に逃げればいいだけか。

しかし、予想に反して、見慣れた姿は周囲にまったく見えず、少し寂しいような気持ちになった。

あいつはきっと強くなる。だから、またどこかで会える時が来るかもしれない。もしその時有名になっていたら……私が剣を教えたんだぞって胸を張ればいい。

シャロンは、そう考え、清々しい気持ちで東門をくぐり、新たな冒険への一歩を踏み出した。

……が。
「なんで、ここにいる」
踏み出した途端、なぜか外壁にもたれていたアルフレッドを発見した。
「グレンさんに、教えてもらった」
グレンタール。町と同じ名前の人は一人しか知らない。つまり、私がお世話になった宿の主人。

「しまった。思わぬ伏兵が」
舌打ちをしそうになり、アルフレッドの顔を見て思い留まった。怒っている、というより理由が知りたい、といった感じだが、じっとこちらを見るのでやけに迫力がある。

「……どうして逃げたの？」
そのままで尋ねてくるので、つい、ぽろっと零してしまった。
「私は、まだ未熟なんだ」
アルフレッドはきょとんとした表情になる。
「とてもじゃないが、誰かと一緒に旅をする余裕なんてない。共倒れになるのがおちだ」

こら。こっちが真剣に話しているのに笑うな。

「……僕も、言ったはず。強くなるために旅をするんであって、守ってもらうためじゃない。ただ、一人だと足りないところがあるから、一緒に行きたいだけ」

「そう、か」

シャロンは肩の力を抜いた。

「本当にいいんだな？私は無理だと判断したら容赦なくお前を見捨てるが」

「……かまわないよ。これからよろしく」

アルフレッドが手を差し伸べ、ためらいながらもそれを握る。

このことをエリーにはなんて伝えよう、と心の内で考えながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8034x/

異郷より。

2011年11月22日01時12分発行